

『米欧回覧実記』に現われた2つの近代語について

羽田野 正 隆*

キーワード：久米邦武、米欧回覧実記、観光、景象、景観

はじめに

わが国が明治初期に始まる近代化において、漢字2字を駆使して欧米の概念を摂取したことはよく知られている。それらの中には、大きく分けて中国古典に典拠をもつものと独自に生み出したものの2通りがある。いずれの場合も試行の繰り返しの中で適語が求められたので、定着の過程で役割を終え死語となったものもある。この小稿はそのような例も含めて久米邦武編『米欧回覧実記』(1878)が近代語の成立に果たした役割の一端をみようとするものである。

取り上げる用語としては、古典に由来するものから観光、それ以外のものから景象を選んだ。いずれも地理に関わりの深い言葉である。

1. 観光

観光という言葉に最も近い英語は Sightseeing である。その Sightseeing を単純に漢語で置き換えれば「観景」となるであろう¹⁾。しかしそうはならず、観光となり定着して今日に至っている。なぜだろうか。

観光学の教科書には観光という語の由来についてふれているものが多い。たとえば小池洋一・足羽洋保編『観光学概論』(ミネルヴァ書房, 1980)では、「言葉の起こりは中国古代の『易経』のなかの「観国之光, 利用賓于王」(国の光を観るは、もって王に賓たるによろし)にもとづくもので、本来は他国の輝かしい文物を視察する意であるから、国際的なものを指した」とあり、同書の別の箇所には、「幕末の安政2年(1855)幕府がオランダから贈られた外輪船の洋風軍艦に観光丸²⁾と命名、元治元年(1864)佐野藩の藩校が観光館と称し、云々」とある。語の出典や誕生について更に詳しく知りたい向きには、山本脩『日本人の旅・雑考』(エナ

ジー叢書, 1975)や梶本保邦『観光よもやま話』(鹿島出版会, 1980)などが参考になるであろう。ただし、それら二書では観光という語のより近い語源についてはふれられていない。

『米欧回覧実記』を手にした人なら題辞に記された観・光という文字がまず眼にとまるに違いない(図1)。この二文字こそは今日の観光という用語の原点であったと考えられるが、そのことを指摘した例は、必ずしも多くはない。管見にとまったものとしては、毎日新聞が米欧回覧実記の特集を組んだ際の記事(1992年2月20付)の中につぎの



図1 『米欧回覧実記』の表題(右上)と題辞

*北海道大学文学部

記載がみられる。すなわち『米欧回覧実記』の冒頭に、特命全權大使だった岩倉具視が「観光」という題を寄せている。観光は、(中略)ももとは「観国之光」で、「他国の光華をよくみる。その国の文物制度をみる。転じて、他国の山水・風俗などを遊覧するにいふ」(諸橋大漢和辞典)だった。岩倉使節団は文字通り西洋諸国の国の光をみてきたのだが、後者の意味の観光の先駆けもしている」と記されている³⁾。また高田誠二『維新の科学精神』(朝日選書、1995)には、「この『回覧実記』の扉の部分には、岩倉の筆になる「観光」の文字がしるされていて、この語の用例の〈はしり〉ともいわれる」という紹介がある。もっとも、大久保利謙編『岩倉使節の研究』(宗高書房、1976)では、「「観光 明治八年三月題 右大臣岩倉具視」の題辞を掲ぐ。(自筆ではない)」とあるので、大久保氏の指摘が正しいとしたら、題辞の選定も著者(編修者)久米邦武によると考えるのが一応自然である。そしてその場合は、久米は漢学者だから、漢籍から造語したとみるよりも、元佐賀藩士だから、幕末期、長崎海軍伝習所所属の観光丸は身近な存在だったとみる方が納得がいく。しかし詳しくは今後の検討に待ちたい。いずれにしても「観光」は米欧回覧の旅に対して象徴的な意味で用いられたわけである。

船への命名と紀行の「題辞」とでは、同じ言葉を使いながらも、その創出の背景は大きく異なる。後者の方が後の観光により近いであろう。けれども、ともに具体的概念として用いていない点では類似している。そこで、このたび新たに作成した「実記データベース」とその用語検索機能を使って、文中に実際の用例があるかどうかを調べてみた。その結果、90巻につぎの1例を見いだすことができた。「欧洲各国の文明に進みしは、国民の利益を謀るに、競励奮勉せし積成にて、天然山水の利を開きし功は、最も観光中に矚目すべき所多し」。おそらく、これが後の観光という言葉に一番近いルーツであり、題辞も含めれば、『実記』こそは観光という語の原点とみてよいように思われる。

観光は、明治20年代には外国人旅行者誘致との関わりで、明治30年代には(台湾の)蕃人の内地観光のように原義に近い形で使われていたが、昭和に入り旅行の機会が広まるにつれ、次第に本来の

意味を薄めていったと考えられる。

2. 景象

「観景」の逆、景觀の場合はどうだったのであろうか。この用語の普及に大きな役割を果たした辻村太郎の『景觀地理学』(地人書館、1937)によって、その導入の経緯をみると、「景觀という言葉は独逸語のラントシャフト(Landschaft)、英語のランドスケープ(Landscape)と同意語である。元々何れもが風景と訳すべき語であるから、特に其の上に地理的といふ冠詞を附けるならば、景觀地理で云ふ意味の景觀であることが明瞭となる。我が国で初めて景觀と云ふ語が使はれたのは、植物学の領域に於てであって、三好博士に依って植物群落相(Physiognomie)を言ひ表はすのに使用せられたのが嚆矢であると云はれてゐる。現在では非常に一般的になって、風景と同じ意味に使用されているが、地理学では此の語に少々特別な意味を帯ばせてゐるのである」と記されている。また、同氏の「文化景觀の形態学」と題する論文(地理学評論、1930)では、文化景觀は地形とのアナロジーないし地形学の方法論の人文現象への適用例と考えられており、しばしば文化景と略されている。さらに、この論文より5年前に書かれた同氏の書評の中には「所謂自然景、文化景、或は調和景(Harmonische Landschaft)等の定義を如何に定めるか、術語を何う決めるか等の問題に関して議論はまだ一定していない云々」(地理学評論、1925)とあって、当時 Landschaft の訳出にあたって、景と組み合わせられる一字を模索していた様子がうかがわれる。

そのような状況のもとで、辻村氏は三好学氏の景觀なる用例を知り、観の一字を選定したことが分かる。三好氏はいつ頃どのような文献の中で景觀という言葉を使用したのだろうか。氏の主な著作に目を通したかぎりでは、明治38年刊行の写真図譜『日本植物景觀』(丸善)が最も早い時期の用例と思われる。同書の表題や序に植物風景と植物景觀が同時に使われているのが理由のひとつである(図2)。また撮影対象となった植物は主に各地の庭園のものが選ばれており、庭園は Landscape Garden と英訳されている⁴⁾。庭園観賞は景觀という言葉を引き出しやすくしたのであろう。その場合で

観景物植本日

物植養培物植生野本日

び及

説解 = 並集書真寫ノ景風物植

図2 三好学『日本の植物景觀』の表題(副題に注意)

もコンプレックスを含む相観という語が有力な下敷きとなったと考えられる⁵⁾。

他方、辻村氏の「景觀」は Landschaft の訳語として日常語の風景や景色をあてにくいために、また積極的には人文的構築物を含むう用語として導入されたと考えられる。Landschaft がスイスの Basel-Landschaft のように「地域」や「領域」⁶⁾と訳されたなら、原語のある意味を伝えたかもしれないが、その場合は、この語のもつ形態的・可視的側面—これこそが対象を明確化する上で重要なのだが—は伝わりにくかったであろう。

ここで注目しておきたいのは、三好氏が植物学の見地から Physiognomie に景觀をあてているのに対し、辻村氏の方は地理学の見地から Landschaft を景觀にあてていることだろう⁷⁾。このように、元になる語が異なるので、景觀は事実上辻村氏に始まるとみてさしつかえないと思われる。用語は概念に対応していなければならないからである。

景觀という語が造られる前に風景や景色よりも客観的な言葉で、自然も人文も表せる言葉があっただろうか。志賀重昂『日本風景論』(政教社, 1894)と久米邦武『米欧回覧実記』についてみていきたい。

まず『日本風景論』では、風景は本文中に4例、景色は同じく1例しかでてこない。代って多く使われているのが「火山国日本の景象の到る処警拔秀俊なるに似ざるなり」、「北海道の景象や仮装せず、矯飾せず」などのような景象という言葉であり、全部で9つの用例がある。同書は初版刊行後9年間で、15版を重ねたほどのベストセラーであるから、景象がさきの相観とともに景觀なる語の創出に、何らかの役割を果たしたとも考えられる。

景象がこのように普通に使われていることは、この語が初めての使用ではないことを暗示してい

よう。そして、もし最初に使われているとしたら、世界各地の異った風土を視察した久米邦武の『米欧回覧実記』の中にはないと思われる。そこでさきの用語検索機能を用いて調査した結果、つぎの14例が得られた。

- 1) 欧洲今日の富庶をみるは、一千八百年以後のことにて、著しく此景象を生ぜしは、僅に四十年にすぎざるなり。(23巻)
- 2) 時ありては、榛栗の並木ある路を馳行す。景象宛として東京の近郡に行が如し。(31巻)
- 3) 英国の北境、秋を催す早く、荒原にあへば、大抵此如き景象なり。(36巻)
- 4) 緑樹をうえ、清爽宏麗、人をして宏苑の景象中に居住せしむ。(42巻)
- 5) 両苑の景象同じからざれども、其繁華をなし、快爽を受るは一なり。(44巻)
- 6) 総て米欧の地を回り、凡そ座臥心目に感触する、治安の効、文明の華、みな鍔の変形して、此景象を幻出せるのみ。(50巻)
- 7) 欧弗両洲の諸国中にて、尤も其景象に宜しき所の真景を写す。(72巻)
- 8) 欧洲諸都府中に於て、別機軸の景象をなせる一奇郷なり。(78巻)
- 9) 市塵参差として海湾を填塞し、粉壁の色は海水の碧なるに映じ、景象亦佳なり。(80巻)
- 10) 欧洲に商事を取扱ふ景象を、簡短に評すれば、規律の厳正なる中にて活潑なる詭権を用ふと謂ふべし。(93巻)
- 11) 鞆鞆琅琅として海面常に白く、景象壮快なり。(97巻)
- 12) 其景象また、欧、弗、赤野禿山の觀にあらず。(97巻)
- 13) 欧洲より来りて、此景象をみれば、真に人間の極樂界と覺ふが如し。(97巻)
- 14) すべて此辺の浜海は、浪勢強くして、景象壮なり。(97巻)

上にみられる景象は景觀という語が未だ生まれていなかった時期に使われたものであるが、10)を除けば、すべて景觀に置き換えることが可能である。してみると、景觀という語の胚珠のひとつは『実記』の中に育まれていたということになるか。

おわりに

『米欧回覧実記』には、上にみた2例の他にも労働・大陸地・都府など、後の用語の創出に何らかの影響を及ぼしたとみられる語が散見される。それらについては、稿を改めて論ずることにしたい。また同書には、著者のすぐれた地理観が随所に記され、中には教育を通じて導入された後の地理学にはみられない卓見が含まれているので、それらについても、折をみて紹介したいと考えている。

注

- 0) 本稿は、文部省科学研究費成果報告書『地理古典データベースの構築と利用に関する研究—久米邦武編『米欧回覧実記』を事例として—』（平成8・9年度）の一部に加筆、訂正したものである。
- 1) 観景という言葉は、現代中国語でも「景色をみる」の意味で使われている。
例：〇〇山観景路線図、〇〇観景站など。
- 2) ちなみに、観光丸の原名はスンビン(Soembing)号で、スンビンとはジャワ島中部ボロブドール遺跡の北にある富士山型の山の名である。
- 3) この特集記事の執筆者は、歴史小説家の古川薫氏であるが、引用箇所は囲み記事中に見られるものである。
- 4) この場合の庭園は、いわゆる風景式庭園のことである。この種の庭園については、白幡洋三郎『庭園の美・造園の心』（NHK人間大学テキスト、1998）が参考になる。
- 5) 最近、生態学者沼田真氏は景相という語を景觀と類似の概念に用いている。この場合、前者は相観の前の一字を、後者は後の一字を採ったことになる。たとえば、『景相生態学—ランドスケープ・エコロジー入門—』（朝倉書店）参照。
- 6) 鏡味完二氏は「地名分布の空洞と伝播の諸型式」（地名学研究7号、1958）で地名の分布域「heim-Landschaft」を引用して、このラントシャフトは景觀と訳すよりも、「領域」とするのが一番よさそうに思われるとしている。
- 7) Landschaft を景觀にあてたことの適否については、つぎの文献が参考になる。田村百代「地理学における「景觀」と「相観」—わが国地理学界での混乱—立正大学地理学教室創立60周年記念会編『地域の探究』（古今書院、1985）所収